

ロシア侵攻に対しての一つの視座

田中 史郎

このロシア侵攻を「ウクライナ戦争」と表現すべきか否かはさておき、連日のニュースに心を痛めている人も多かろう。小生もその一人だ。如何なる理由があろうと、人道的な見地から即刻の停戦を求めることに関して異論はない。

やや回りくどい言い方をしたのは、この間の情報がいわゆる西側からのものばかりであること、また歴史的経緯がほとんど語られていないことなど、不十分な点がないわけではないからだ。「ミンスク合意」、「ミンスク合意 2」の問題をはじめ、NATO の問題、アゾフ連隊の問題、さらに遡ればソ連の解体、ロシア革命の評価など、考慮すべき事柄は多い。

ここでは、しかし、たった一つのことを述べてみたい。それは、現ロシア政権とロシア人民（国民）を区別して考えること、また同様なことだが、現ウクライナ政権とウクライナ人民（国民）を区別して考えること、この点に他ならない（同様の視座は現日本政権と日本人民（国民）との関係でも成立する）。言い換えれば、事態を国家間対立として見るのは、一面的であり、事の本質を看過する懸念があるということだ。今回の戦争においても、ウクライナとロシアでは、互いに親戚関係や縁者をもつ人々も多いと聞く。ウクライナ人民とウクライナ国家（政権）は、またロシア人民とロシア国家（政権）は当然ながら利害が異なる。

戦争は国家対国家の戦争となるが、その内実は内政の失敗を糊塗するため、ないしは政権の求心力強化のためになされることがしばしばある。あるいはひねくれた見方をすれば、それは軍事産業によるロビー活動の結果でもある（例えば、アメリカのイラク戦争をみよ）。

昨今では、日本において在住ロシア人バッシングが多いとの報道もあるが、それらは上の観点からみても間違っている。あくまでも我々の非難すべき対象はプーチンとその政権である。この瞬間も殺されている人々がいる。ロシアの兵士に訴えたい。プーチンのために「殺すな」。プーチンのために「死ぬな」。即刻の停戦を求めるものである。

（『セングードつうしん』第 5 号、2022 年 4 月）